

キャンパス計画情報交流シンポジウム(第10回)記録

- 主催 日本建築学会都市計画委員会キャンパス計画小委員会
- 共催 タウン・オン・キャンパスまちづくり推進会議, 日本建築学会九州支部, 日本都市計画学会九州支部, 財団法人九州大学学術研究都市推進機構, 九州大学
- 日時 2007年8月28日(火) 午前の部 10:30-12:00, 午後の部 13:30-17:30 (引き続き会場を移動して懇親会を開催。)
- 会場 九州大学伊都キャンパスウエスト2号館3階大講義室 (819-0395 福岡市西区元岡744, 九大工学部前バス停下車) <http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/info/index.html>
- 参加費 無料
- 参加者 92名
- 主旨 大学のキャンパスとまちづくり関係者が、それぞれの立場で抱える課題や経験などを幅広く情報交換し、啓発する機会をつくる。
- スケジュール

午前の部 伊都キャンパス見学会 会場: ウエスト2号館3階大講義室

- 10:30 ビデオ上映/ 知の拠点/ 工学系地区基本設計/
- 10:45 主旨説明とツアー案内/ ウエスト2-4号館/ 客員研究員室/ 情報学習室/ 石のアート/ 理系図書館/ ビッグどら など
- 12:00 昼食/ ビッグどら にて各自
- 12:40 事前上映/ ウエスト2号館3階大講義室/ 知の拠点/ マスタープラン2001/工学系地区基本設計/ センター地区基本設計/ 九州大学の歩み

午後の部 シンポジウム 会場: ウエスト2号館3階大講義室

- 司会: 小篠隆生(北海道大学)、鶴崎直樹(九州大学)
- 13:30 (10分) 開会挨拶 シンポジウム主旨説明 小林英嗣(北海道大学教授)
- 14:00 (30分) 大学と地域の連携による都市再生の展望/ 坂井和也(内閣官房都市再生本部企画官)
- 14:30 (30分) 東北公益文科大学の取り組み/ 小松隆二(東北公益文科大学学長)
- 15:00 (30分) 北九州市立大学学術研究都市の地域連携/ バートデワンカー(北九州市立大学准教授)
- 15:30 (5分) 休憩
- 15:35 (30分) 伊都キャンパスと学術研究都市/ 坂井猛(九州大学新キャンパス計画推進室副室長・准教授)
- 16:05 (30分) 文教施設企画政策の展望/ 野口 健(文部科学省大臣官房文教施設整備計画室室長補佐)
- 16:35 (50分) 意見交換
- 17:25 (5分) まとめ
閉会の辞 小島敏行(九州大学施設部長)
- 17:30 閉会/ バス移動(伊都キャンパスから懇親会場までバス無料送迎・約20分)
- 18:30 懇親会

会場 志摩エメラルドリゾートホテル<http://www.emld.co.jp/frame.html>
〒819-1334 福岡県糸島郡志摩町岐志 1513 九州志摩エメラルドパーク内

■ 主旨説明 / 小林英嗣（北海道大学）



- ・ 大学は法人化し、長期的な目標を持つ必要がある。
- ・ 日本のこれからと、大学のこれからは、無縁ではない。
- ・ シンポジウムでは、九州大学におけるキャンパス移転と地域との連携の様子など、いくつかの大学における取り組みをご紹介いただく。
- ・ こうした場で得た内容を、自分の大学と照らし合わせて各自持ち帰りいただき、活用して頂くこと、また、同じ立場同士の連携・交流をはかることなどがこのシンポジウムの目的である。

■ 大学と地域の連携による都市再生の展望 / 坂井和也（都市再生本部）



（都市再生本部について）

- ・ 平成 13（2001）年 5 月 8 日に設置され、①都市再生プロジェクトの推進（年に 2 回くらいのペースで決定、今まで 23 プロジェクトを決定）、②民間都市開発投資の促進、③全国都市再生モデル調査（必ずしも大都市のみの支援ではない）という 3 本柱を進めている。

（都市再生モデルプロジェクト）

- ・ 環境面などで何をするのかという視点から決定していたが、平成 17（2005）年 12 月には、誰がやるのか、担い手となるのかが重要ではないかということにポイントを置いた「大学と地域の連携協働による都市再生の推進」を決定した。
- ・ モデルプロジェクトは、何を目標にするのか、という視点から決定している。
- ・ 地域から見ると大学には様々な存在価値がある。

- ・大学にとってもメリットがあり、共に発展していく仕組みが構築されるとよい。
(まちづくりワークショップ)
- ・8つの地域でワークショップをおこなった。
- ・地元との連携をはかることで 大学は志願者数が増加するなどプラス面もでてくる。
- ・東北公益大の取り組みが、関西学院大、豊橋市「全国まちづくりサミット」などの動きに影響をあたえ、全国に広がっている。
(これから注目していくべきもの)
- ・遠方の地域と大学が連携する例もある(米沢・若狭)。
- ・1対1ではなく、複数の大学と連携しているものが多々みられるようになった。
- ・どのくらい地域連携を展開しているのか、市町村を対象にアンケート調査を実施(1,800の市町村に送り、回答 900)した。
- ・体制を整備していくという課題があり、全国まちづくりネットワークなどを活用して情報交換を活発に行っている。

■東北公益文科大学のとりくみ / 小松隆二 (東北公益文科大学)



- ・東北公益大は、1学年 240 名の小規模な大学である。予備校からは、存続は無理、田舎になぜつくるのか、と批判を受ける。
- ・公設民営であり、県・市町村が施設をつくってくれたため、無借金経営ができています。
- ・新しい理念として、公益学を掲げている。非営利部門の中でも公益部門を総合的に研究する。
- ・大学づくり・キャンパスづくりをこえた、大学まちづくりの一環としての大学づくりを呼びかけている。
- ・地域こそ大学に欠かせない。米では大学は地域の支援が大きい。日本にもそういう大学がつくれなにかと考えた。
- ・大学が上から「貢献してあげている」ではだめであり、相互貢献の関係が重要である。
- ・大学には、門、塀はない。キャンパス、食堂、図書館を土日祝日関係なく開放している。
- ・市民の利用者は多く、大学在籍数を上回るくらいである。
- ・大学側も利用してもらうための工夫をしている。たとえば、図書館は地元の山形文庫などを充実させている。

- ・地元では大学の後援会をつくり、支援してくれている。
- ・地域との関係で大切なことは、教職員と学生の参加である。
- ・県では、「公益」のふるさとづくり、森づくりなどを看板としている。長期計画に、公益を盛り込んでいる。
- ・地域づくりをやることと、教育・研究をきちんとすることは、無縁ではない。
- ・「大学地域論」に書いているが、地域活動こそ教育研究であり、大学に最もかけているのは地域認識である。
- ・首都圏での地域活動と地方での地域活動は、同じか。一般論では、地方のほうが実行しやすく、首都圏は実行しにくいという認識がある。
- ・大都会であれ、地域づくり、まちづくりの手がかりが多数ある。大切なことは大学の決断と実行である。
- ・大都会にある大学が多く、そこでは大学の枠ができあがっている。学生を集めるのは有利であり、そこに地元民ははりにくい。
- ・商店街や駅前での活動だけが地域づくりではない。1人でもできる 歴史に携わること、学ぶことでもまちづくりに貢献できる
- ・地域といかにより関係を結べるかが大学の発展への鍵となる。

■ 北九州学術研究都市の地域連携 / パートデワンカー（北九州市立大学）



（北九州学術研究都市について）

・北九州学術研究都市には、北九大、九工大、早大、福大の4大学が集まっている。カフェテリア等、一般客も利用可能な施設を持つ。

（ひびきの南公園）

- ・大学と、新住民の近隣公園であり、一緒に整備してはどうだろうかと提案した。
- ・井戸端会議を実施して、主婦達に課題をあげてもらった。
- ・住民に基本構想などを説明した。
- ・子供たちは現状のままでも遊んでる。整備の必要性はあるのかという意見もでた。
- ・これから公園を整備する敷地で、子どもたちに遊んでもらい、整備のための課題を確認した。

- ・みんなで作った公園の名前を公募した。また、公園のオープニングイベントとして、地元の少年チームと大学生によるソフトボール大会を実施した。
- ・フォーリーコンペを実施した。審査員に市の役員、町内会、大学などが加わり、ワークショップを重ねて完成した。
(ひびきのビオトープ)
- ・砂利の仮駐車場だったところを、月1回のペースでワークショップを実施し、一般市民と学生でログハウスなどをつくった。
(里山保全)
- ・竹の伐採を毎月第2土曜日に開催した。大学、NPO、民間企業、他地域と連携して、お盆と雨天時以外に活動している。
- ・伐採した竹で、竹細工教室を実施した。年配の人が夏休みに子どもたちに大学で教えてくれる。
- ・竹のオブジェづくりや竹チップとしての再利用を行っている。
(もちつき大会)
- ・もちつき大会を毎年開催している。毎年200～250人が参加する。
- ・課題はあるが、地元の人も参加楽しくやっている。

■ 伊都キャンパスと学術研究都市 / 坂井 猛 (九州大学)



- ・これまで長い時間をかけて提案を繰り返し、様々な課題を整理し、学内外の多くの専門家、利害関係者が関わって、多くのことを吸収してきた。
- ・現キャンパスには、狭隘や歩行者と自動車の混在や狭隘など反省点があり、これらをふまえた計画をつくっている。
- ・大学改革を実施してきた九州大学のビジョンを実現するための器として、新キャンパスをつくっている。
- ・新キャンパス計画専門委員会を中心にワーキンググループによって与条件を整理し、計画に反映するとともに、環境影響評価の実施や環視など、学内の専門家の知恵を活かしたキャンパスづくりを行ってきた。
- ・古墳などの歴史環境、自然環境との共生を重視した計画をつくった。生物多様性保全ゾーンをつくり、種の保全に役立てている。

- ・ 六本松地区全学教育施設の1, 2年生の移転を2年後に控え、3月からタウン・オン・キャンパスまちづくり推進会議を開催し、まちづくりの動きをはじめた。
- ・ まちづくり部会、ライフスタイル部会、食農輪部会、情報発信部会の4つの部会にわけて検討を行い、多くのアイデアがだされた。
- ・ 学生と地元住民が活動することが、まちの活性化につながっている。

■ 文教施設企画政策の展望 / 野口 健 (文部科学省)



(国立大学等施設の現状)

- ・ 築25年以上で未改修のものは全体の3分の1であり、大きな問題を抱えている。
- ・ アンケートより 教育・研究で施設がいかに重要かということがわかる
- ・ 老朽化、耐震化は、国立大学施設の抱える問題点である。

(科学技術基本計画)

- ・ 施設整備では、大学院・卓越拠点・病院は整備目標をクリアしたが、老朽化対策は優先的目標に含まれなかったため、目標の6割弱までしかクリアできなかった。
- ・ 学際の壁をはらった総合研究棟の先駆的事例として、九工、新潟大、九大などがある。
- ・ 研究開発に伴う整備は、地方公共団体が寄付できるようになった。

■ 意見交換



- 人口のあまり多くない中小規模の都市の大学は、地域とどう関わっていくかは課題であろう。
- やれるものはやっていく。同時多発的にすべきと考える。予想できない成果こそいいのではないか。
- 大学にいる人たちが変わらないといけない。これは！といえる事例も必要であろう。
- アンケートからもわかるように、市町村側は大学と付き合いたくないわけではない。
- 大学は、とっかかりになるところがない。中小規模の都市では特にない。青森の事例では、学生が観光事業に参入したり、中心市街との空き店舗活用をしているが、参考になると思う。
- 大きなエリアでキャンパスを考える必要がある。
- 九州大学の場合、最初は福岡市内部の移転だったのが、キャンパス面積の不足から、志摩町、前原市、福岡市またがることになり、結果的に大きなエリアとなって進んだ。
- 地域からは、大学側の地域連携の総合窓口の必要性がいわれる。市の個人と大学の特定の先生のつながりになりがちであるので、知財本部の次のステップとして、地域連携本部を各大学でつくる必要があるのではないか。
- 国立大は、地域づくりにばかり特化すると県立大との境界がむずかしくなるので、やりすぎず、やらなさすぎずのバランスが求めあられる。
- 地域でやったことが全国へどんどん発信していく。地域とはそこで終わるものではない。
- 「連携は大事」といい続けるばかりではしょうがない。次のステップは本当に困っているひとたちと、知識などを提供する人たちをつないでいくことであろう。
- 北九大の事例は1つの研究室がやってきたこととは思えない。組織的な取り組みに発

展していれば秘訣を知りたい。

- 商店街に行ったときから、偶然の重なりで始まった。北九州は環境にかかわる人たちが多く、その集まり、研究会はどうしたいかを話すばかりではなく、実際にやってみればいいということで竹も切り始めた。新聞で見た企業が、竹をほしいということになって、毎月続けるようになった。

■ まとめ / 小島敏行 (九州大学)



- 個人と地域をどう組織にもっていくか、担当者がうつればデザインもばらばらになるので、コアになって情報発信して地域との連携を強めていく必要がある。
- 建築・ものづくりは楽しい仕事なので、是非続けてもらいたい。完成させないでひきわたすことも大事だろう。
- 都市と大学の新しいマッチングシステム構築にむけた議論と実行を今後も続け、次回に繋ぎたいと思う。